

父 田中迪夫の人生

会員の皆様にはおそらく代替わりされたり等もあって、父を知悉するかたはさほど多くないのではと推察される。追悼文を書くようにとのお話を受け、たいへん光栄なので、思い出をしたためて父在りし日を偲ぶとともに、この機会をいただけたことに感謝の意を表したく思う。

先日、私の書棚に『神庫』が一冊、ちんまりと挟まっているのを見つけた。第四四号。二〇〇三年の古い雑誌がなぜここにあるのだろうと訝しみながら頁をめくってみると、巻頭グラビアに現れたのは、フルートを吹く父の写真に紹介文、添えられた見出しは「下手の横笛で三十年」。うわっ、おとうさん、と思わず声を上げた。

すっかり忘れていたが、当時父が「とっておくように」と手渡してくれたからこそ私が保管していたのであろう。晴れがましいことは苦手と自評する父であったが、下手の横好きが、本人はまんざらでもなかったのである。

『神庫』には、生前父が時折随筆を寄稿させていただいていたと、編集の方から伺った。百二十五年の長い歴史をもつ鎌倉市医師会、会員の先生方のための会誌ということであるが、立派な体裁である。昨年旅立った父は八十一才、

田中迪夫は昭和十一年、岡山市の生まれ、兄一人、幼少より文武両道、日赤婦長だった母親の願いを聞き、岡大医学部に入學。インターン先は長野の佐久病院、信州の諸峰を愛でながら研鑽に励み、併設看護学校の女学生と結婚、四人の子供を授かり、倉敷、松山、練馬、川崎など各地の総合病院の外科勤務を経て、憧れの鎌倉へ一家六人を率いて引っ越してきたのが昭和四十八年のことだったろうか。

その翌年の正月六日、岡山の祖父が、明け方の冷えた厠から布団に戻ったあとそのまま目覚めなかった。連絡を受けて葬儀に向かう新幹線の中、隣席で寝ていた父が落涙していた。子供だった私にとって普段は怖い父なので、おとうさんも泣くのかと驚きをもって眺めたものだ。

その後、父は大船中央病院の外科に十五年勤務したのち、一念発起し診療所開設に至るが、その前に大事件があった。

高校生の妹が喘息で急死したのである。奇しくも父の五十才の誕生日、妹が心肺停止に陥った朝は連休で、私はたまに帰省していたが、宿直だった父は不在であった。私は妹の死を受容できず、慟哭の日々を過ごし、乗り越えたと思えるまでには十年の歳月を必要とした。同様に、両親や弟達にとっても、悔いが残る辛い出来事であった。

そのころ、岡山での一人暮らしがどうにも困難となった祖母を、父はなにかば騙すようにして鎌倉へ連れてきていた。妹が急死した年の暮れ、何につけても忍耐強く、常日ごろ辛い痛いと言わない祖母が、ひどい腹痛を訴えている。腸閉塞の悪化だった。父は「自分が母親の手術をする」と決め、その日のうちに開腹してみれば、捻転にも等しい完全な閉塞で、あと数時間手術が遅れていたら予後は絶望的だった。娘を救えなかった自分は医者になった甲斐がないと嘆いていた父も、母親を助けることができ、すこし気を持ち直したようにみえた。祖母はその後十年間、九十才を迎える直前まで元気に生きた。

常盤に診療所を開設したころには、長女の私はすでに実家を出ていたが、父の高揚感、充実感がよく伝わってきた。同業の先生がた、従業員の皆さん、地域の方々に助けられ、

哀歓苦楽をともしして父母は精一杯がんばってきたのではないかと思うが、悲しいことに、平成二十五年、母が頭頸部癌のため六十九才で他界した。父自身もついこの前までは、診療のあとにワカミヤのプールで千メートル泳いで帰ってくるなどはなんでもないふうになっていた体力の持ち主だったので、晩年に狭心症やら脳梗塞やら、体調が思うように戻らないのを本人もさぞや納得がいかず、不



服に感じていただろうと思う。

学生のころはバレーボール、ボート、新聞部、合唱、山登り。就職してからも、読書、カメラ、鉄道、木版画、水泳、クラリネット、フルート。六十才を過ぎてからはパソコンに夢中だった。元来が勉強好きで、時間と費用をかけて新しいものに飛びついたがる癖があると、自身を評していたものである。

見送りを終えて半年が過ぎ、落ち着いて考えてみると、結局のところ、本人は自分のやりたいことをやり、食べたものを食べ、生きたいように生きた、ということではないのかなと思うことがある。

また、晩年は死後の世界に興味があったようでもあるので、今ごろ常世の国を満喫しているならばよいなあと、これは私の希望的観測であるが。鎌倉のお墓には骨壺が三つ並んだ。さびしくはないはずである。年末には父の郷里へも出向いて、先祖の墓前に報告した。父の祖母は古神道の系譜を引き、他人の相談事を聞いたり、子供だった父は、家に知らない人が来るので嫌だったそうだが、頼まれると祈祷などもしていた人助けの家系だったようである。

父の世話をするとき、相手を老人だと思ったことが一度もない。ふと陥るふしぎな感覚で、まるで弟のような、妹のような、あるいはよく見知った親しい間柄のような、これは母の介護のときにも感じていたもので、こんなことを書くと、少し奇異な感じもするが、出会えたことは幸せであつたし、いずれまた会えるような気がしている。

万年青年の如き瑞々しい感性を宿していた父、本質を一言でいえば、「純真」であろう。家族に対してはぶっきらぼうであつたが、ふるい患者さんからは、「先生のやさしいお声が、今も耳に残っております」と言っていただけ。また、学生時代の友人の方々は、みな一様に、「自分は迪夫さんのいちばんの親友で」と私におっしゃる。

よい人生だったのではないだろうか。

田中迪夫 平成二十九年六月二十九日 歿

お世話になった方はたくさんおられて、ここには書ききれません。皆様、ほんとうにありがとうございます。

(平成三十年一月三十日)